

このまちで歩んでいく

「共に働く」職場から地域づくりへ

協同労働が拓く自立支援

- ・ 支援制度の一步先へ
- ・ 子どもの学びと育ち
- ・ 私たちの居場所と仲間づくり
- ・ 地域づくりに向かう拠点



北海道
苫小牧市

サポステ利用者からスタッフに
学習支援を始めて



高田
紀子

(日胆まちづくり地域福祉事業所)

思春期の子どもたちと

とまこまい地域若者サポートステーション
(サポステ、北海道とまこまいし苫小牧市)の利用者から、
スタッフになって働きだした私。ワーカーズ
コープの組合員となり、今年(2016年)で5
年目になる。

この春からはサポステを離れ、生活困窮世
帯等の子どもの学習支援事業(ひだか日高振興局委託
事業)に従事している。対象は生活保護世帯や
生活困窮世帯の小学5年生から高校生までで、
うらかわちよう浦河町や新ひだか町で週1回学習会を開いたり、
訪問支援などを行っている。

思春期真っ只中の子たちが、最初は私が話
しかけてもすぐそっけない態度だったり全
然ニコリともしなかったのが、1年、2年かけ
てやっと笑顔を見せてくれたり、「実は学校で
いじめられて毎日きつい」とか、普段つらい
と思っていることをレクリエーションや雑談
時に話してくれた時は、めげずにその子と関
わってきてよかったなと思う。

ワーカーズコープ 日胆まちづくり地域福祉事業所
設立 2010年

事業内容 若者支援、生活困窮者・生活保護受給
者支援、児童センター、放課後等デイ

そもそもなぜサポステをやりながら、対象
も支援の内容もまったく違う事業を始めよう
としたのか。

その理由は、サポステで、「仕事をしたい」
という気持ちはあってもなかなか就職に結び
つかない人たちと出会ってきたこと。履歴書
を書く時になかなか漢字が書けなかったり読
めなかったり、かけ算やわり算ができないな
ど、大人になっても小学生の時の学習のつま
ずきがそのままになっていて、基礎学力や学
び直しの必要性を感じていたこと。また、私
自身、学生時代から「貧困の連鎖」というキー
ワードに関心があって、北海道で生活保護世
帯の子どもの学習支援が始まると知った時に、
「これは絶対、私たちがやらなければいけない
事業だ」と思った。

今までやったことのない新しい事業で、最
初は不安が大きかったが、まず一番にワー
カーズコープで学習支援をやることの意味を
考えた。そこで出た答えは、学歴社会、競争社
会を生き残ることだけに重点を置いた、「ただ
勉強するだけ」の学習支援に何の意味も価値も
ないということである。そう考えたのは自分
のそれまでの経験を振り返って、「勉強さえで
きればいい」という考えが間違っていたことに
気づいたからである。

この5年間、無職だった時期のことを振り返
ることが何度もあった。なぜそうなったのか。
子どもの頃は何を考え、何をしていたのか。

勉強、就職、がんばったが...

私には小学生の頃から、両親や年の離れた
兄弟の影響もあり、なりたい職業や夢がたく
さんあった。「大学に入れば、必ずいい会社
(いわゆる大企業か公務員)に就職でき、25歳
くらいで結婚して、子どもも2人いて、一生お
金に困らず、死ぬまで幸せに暮らせるんだ」と
信じて疑わない子どもだった(今考えると、ず

いぶん短絡的である)。かなり明確な目標もあったので、中学高校と必死に勉強し、無事に希望していた大学に進学。勉強も遊びも順調で、楽しい学生生活を送っていた。

ところが、3年の後半から始めた就職活動で大きな挫折が待っていた。大学さえ卒業できれば、自分の夢は必ず叶うと思っていたのが、いざ採用試験を受けてもどこにも決まらない。「就職するなら公務員か、正社員」と考えていたが、最終的に決まったのが、地元の役場の臨時職員。挫折感は大きく、実際の仕事もやりがいはいはあまり感じられず、1年半で退職。その後も仕事を探したけれどなかなか決まらず、人生2度目の挫折を味わったのである。

学校や塾で勉強したことは、大人になっても無駄ではなかったと思っている。しかし、勉強ができれば、いい学校に進学できれば、大企業に就職できれば、幸せな人生を送れるということが大きな勘違いであるということに気づいたのは、私が大人になってからである。学校の友人たちもきっと同じように考えていたのではないだろうか。みんなテストでいい点をとって、偏差値上げて、レベルの高い学校を目指していた。私もそれに必死に追いつこうとしていた。「レベルの高い学校」に何の価値があるのか、今となってはわからない。

少し遠回りして出会ったワーカーズコープ。仕事にやりがいを感じ、全国のたくさんの組合員や地域の人たちと出会い、つながることで、自分の生きる自信にもつながった。給料はお世辞にもいいとは言えないが、お金にはかえられない価値がここにはあると思う。

遠回りの人生でも

苫小牧では、障がいのある子どもが放課後や長期休業中に過ごす場所がないという悩みが保護者からあがり、当事者である親、ワーカーズ、地域の人たち（関係団体など）と一緒に、放課後等デイサービス「ぼっけ」（弥生町）を作った。また、生活困窮者の自立相談窓口を実施する中で、予想以上に「今日食べるものもない」ホームレス状態の人がたくさんいたこと、サボステにも年に数回、食べるものに困っ



子どもの頃の夢は叶えられなかったがそれでも今が一番楽しい

ている若者の相談があり、今年の6月には市民の有志と共に「フードバンク苫小牧」が立ち上がった。

地域に必要なことを、同じように考える人たちと一緒に作り出していけるのは、理想的な地域づくり、社会づくりのしくみだ。それができるワーカーズは、夢や希望にあふれている。子どもの頃の目標は達成できていないが、それでも今が一番楽しいし、幸せだと感じている。

学習支援で関わっている子どもたちとは、いろんな体験活動（釣り、外遊び、調理実習など）やいろんな話しをしていきたい。

学校の勉強も大事だが、それ以上に大切なことがある。いろんな人と関わって、いろんな経験をしてほしい。いろんな価値観があっていい。でこぼこで穴だらけ、遠回りの人生でも、むしろその時に経験したことが、その人のこれからの人生を豊かなものにすると考えている。そういうことを子どもたちに伝えていきたいし、いつかどこかで大人になって、この学習支援のことをふと思い出してくれたら嬉しい。

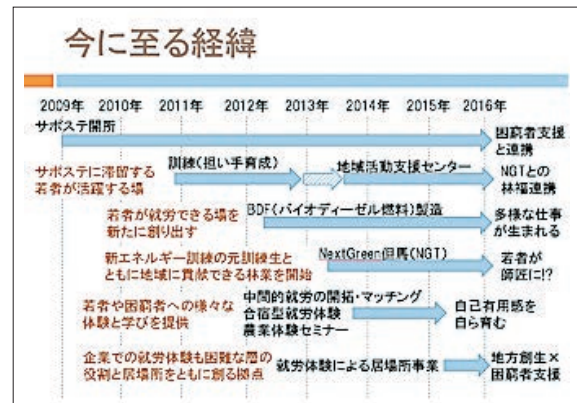
これからの小さな目標は、保護者と一緒に日高管内で子ども食堂を開くこと。そこからさらにいろんなつながりや広がりができたらいいと思う。

兵庫県
但馬地域

働き方を創る

可能性はまちづくり

若者支援から始まった 小さな事業所の挑戦



労協センター事業団 但馬地域福祉事業所

上村 俊雄 所長

労協センター事業団但馬地域福祉事業所は、2009年から兵庫県豊岡市で地域若者サポートステーション（サポステ）の運営を開始。2010年から12年にかけて、基金訓練社会的事業者コース（地域の担い手育成）、兵庫県委託公共職業訓練（ヘルパー講座）などを実施。

2012年には、BDF（バイオディーゼル燃料）事業「但馬油田 風の学校 円」を開始。同年10月から兵庫県委託訓練の公共職業訓練「新エネルギー環境コース」を実施し、このコースを卒業した数人で、森林資源を活用した事業を行う「Next Green^{ネクストグリーン}但馬」を2013年6月に立ち上げた。

また、同年8月からは、サポステ利用者の社会的自立に向けた訓練を行う場として「地域活動支援センター 森の学校だんだん」を開所。

2014年からは、生活困窮者モデル事業の就労準備支援事業、2015年には就労体験による居場所事業を京都府京丹後市で開始するなど、地域の課題と、困難を抱えた当事者の自立・就労を結んだ複合的な事業展開を行っている。

地域課題に取り組む職業訓練から

但馬地域福祉事業所では、2009年から実施してきたサポステを通して、いろいろな背景をもった若者と出会ってきました。その中には、すぐに就職に向かえない人、就職してもすぐに辞めて戻ってきてしまう人などが少なからずいました。

そこで、ステップアップできる場所を自分たちでつくろうと、職業訓練を継続して開催。2010年に行った「農山村地域の担い手訓練」（基金訓練事業）は、実際に農山村地域である竹野町桑野本の廃校を講義の場に、地元の人々の技や郷土料理のレシピを調査するなど、地域の人々や企業から様々な支援を受けながら、自立への力をつけていくという内容でした。僕はその中で、訓練生をサポートする事務局を初めて担当しました。

12カ月という長い期間の訓練で、最初はあいさつもできず、目を合わすこともできなかった利用者たちが、地域のことに気を配るようになり、訓練が終了する頃には、雪かきボランティアをして地域に恩返しをしました。

地域の人たちも、最初は「こいつら大丈夫か？」という感じで見ていましたが、訓練が終わり、就職してこの地域からいなくなると、「寂しい」という声が聞かれるようになりました。

その後も地域の人や地域の課題と深く関わる訓練を行ってきましたが、就職のために市街地に出る修了生が多く、田舎で継続して働



⇧現在の若者サポートステーション豊岡。
ヘルパー講座（県委託）も行う

⇩「森の学校だんだん」（地域活動支援センターⅢ型）にはサポステ利用者も



⇨だんだんでは、Next Green但馬と協力し、林地残材をマキや木工品に加工。漬物加工、こんにやく作り、養蜂なども

⇨2010年、廃校を借りて訓練を始めた
⇩訓練生が地元の雪かきボランティアに



⇩地元の人にみそづくりを教わる



⇩Next Green 但馬の若手メンバーが、今では講師も



⇧BDF事業の開始時には、豊岡市長が給油パフォーマンス

き続けるには、その地域ならではの仕事が必要だと思うようになりました。

豊岡市長の推薦を受け、2012年に兵庫県公共職業訓練として実施した「新エネルギー環境コース」の卒業生たちが、「Next Green但馬」を立ちあげました。主な事業は、低投資・低コストで、間伐を中心に持続可能な山林運営をする自伐型林業です。派遣の仕事を転々としてきた人、サポステの利用者だった人などがメンバーです。

これまでの活動を通して感じているのは、働くことを通じて人は大きく変わるということでした。

電話恐怖症だった

実は僕自身も、もともと豊岡サポステの利用者でした。

用者でした。

僕の学生の頃は、勉強ばかりに打ち込んで、レールに乗って国立大学に入りました。でも、何をしたいかとか特に考えていなかったし、自分は面白みのない人間だと思っていたので、友達もできず、徐々に大学に行かなくなってしまいました。

家を離れて一人暮らしで、誰にも相談しないまま、いつまでも留年を続けていると、親には迷惑かけているな…という思いが強くなり、そのうち、死ぬことばかり考えるようになっていました。

その頃は、どうすれば他人に迷惑をかけずに楽に死ぬかを一生懸命考えていたように思います。

結局、自殺に向けて進めていた準備を親が知り、地元豊岡に帰ってくることになりました。

た。それから、病院に通って少し元気になってきたところで、医師からサポステを勧められ、通うようになりました。

印象に残っているサポステの活動は、「勉強の日」です。利用者同士が勉強を教え合う活動で、先生役をお願いされました。もともと断れない性格なので、引き受けて実際にやってみると、「自分でも役に立ってるんだ」と少し気持ちが上がったことを覚えています。

その後は、“ジョブトレーニング”という名の、事業所内の雑用ともいえる様々な活動を手伝うようになりました。働くことがハードルの高いことだと思っていたけれど、そうで

はないんだな、と感じるようになりました。そして、その時の所長だった伊藤剛さんに「一緒に働こう」と言われたことがきっかけで、2011年に僕も但馬地域福祉事業所の一員になりました。

働き始めた頃は電話恐怖症で、一切電話に出ることができませんでした。同僚から電話対応の仕方を教えてもらい、まずは、同僚からの電話を受けてみることから始めました。

できないと思っていたことが、やってみると、「なんだ、できる…」という感じで一步步進んできたように思います。

特に、公共職業訓練「新エネルギー・環境

「よりよい仕事」づくり

- コミュニケーションを大切にしよう（自己開示ができる職場に）
- 仕事の意味、本質を確認しあい共有しよう
- 変化を恐れず意見を出し合おう（仲間の考えを察する力をつけることも大切）
- 自分たちの仕事は社会的に意義のあることと誇りをもち、仕事をしていこう

「認め合う関係」づくり

- 話し合いを大切にしよう（話し合いのできる関係性に）
- 受容と傾聴の姿勢を大切にしよう
- 自己理解に努め、一人一人がお互いに認めあおう（得意、不得意を互いに知り、自分の能力、仲間の能力を高めあうこと）

「みんなの幸せ」づくり

- 社会の困難、課題に対して寄り添い行動できるようにしよう
- 福祉力は与えられるものではないということを自覚しておこう
- 一人一人の幸せゾーンを広げよう（自分の幸せだけでなく、仲間全員が幸せになれる道を考えていく）

「社会の連帯」づくり

- 地域の特性と地域に住む人の気質を考えたが行動しよう（地域の特徴や強みを探し、それを活かした仕事をしていく）
- 地域とつながり地域の困りごとに目をむけよう
- 感謝の気持ちは感謝される気持ですこたえよう（行動にうつすことが大切）



上村所長

但馬地域福祉
事業所の指針

コース」を開始する時は、今でも印象に残っています。自伐型林業、小水力発電、BDFを3つの柱に学ぶものでしたが、どれもまったく自分が理解していない分野だったため、正直、「こんな訓練できっこない」と思いながらも、とにかく自分たちの目指すことを地域に伝え、共感してもらえる方々と一緒に開講した訓練でした。

自分の言葉で 誰かが動き始めて…

それまで、地域に飛び込んで説明するようなことは、自分には無理だと思っていました。今でも苦手です。でも、自分の言葉で誰かが動き始めたときに、逆に自分がその方々に勇気づけられて、どんどん主体的に話しができていくことに気がつきました。

そういう経験を積み重ねてきて、2015年には、但馬地域福祉事業所の所長を担うことになりました。

まちづくりに向かう自立支援

但馬地域福祉事業所では、生活困窮者の就労訓練の受け入れ事業者となることを考えたときに、自分たちなりの「職場の包摂力と福祉力を高める指針」を作りました。会議の場で、業種に関係なくグループになり、どんな職場であることが、みんなが働きやすく心地よいのかを真剣に話し合いました。

みんながそれぞれに自分なりのキーワードを持っていました。ある人は「幸せゾーン（自分が幸せに思う範囲のこと）」であったり、ある人は「変化を恐れないこと」であったりしました。おそらく、各々が日々の仕事や生活の中で感じ、大事にしながら働いていたのだと思います。

日頃からの話し合いだけでは拾い上げることはできなかったみんなの思いを知ることができて、言い合うことのできる環境も大事だと、改めて気づかされました。

そして、自分たちがこの職場をどういう存

在にしていきたいかということは、どんな地域を目指していきたいかを考えることにつながっているように思います。

この指針を作って劇的に何かが変わったわけではないですが、これまで言葉にならなかった組合員同士の気遣いや、事業・地域へ向かう心構えが形になりました。

何か困ったことがあった時には、この指針に基づいて、みんなで話し合い、全員で克服していく「道しるべ」となっています。

自分も含めて、但馬地域福祉事業所で働いている16人のうち、7人がサポステなどの相談機関や職業訓練を通じて働き始めたメンバーです。自分たちの事業分野は、当初の若者支援から訓練事業、BDF事業、林業などに広がり、作業内容も多様化しました。

いろいろな人と向き合ってきて、その出会ったすべての人が地域で生きていくためには、自分たちだけでもだめで、その人たちが力を出すだけでも足りないし、行政だけに期待しても無理だと感じています。働きづらさを抱えている人の存在については、社会の矛盾自体が、その人たちの困難を生み出しているという意味でいえば、社会に生きるみんなが当事者ではないでしょうか。

そして、多様な働き方・出番が社会に存在すること、そしてそれを自分たちで創ることができる場があることこそが、多様な人が活躍できる社会、流行りの言葉でいえば一億総活躍社会につながるのではないのでしょうか。

仕事を通して人は成長します。仕事おこしには、どんな人にも出番と役割を見つけられるすばらしさがあります。それ自体が、大事な自立支援だとも感じています。

そうして、地域住民や企業にも共感の輪を広げながら、誰もが住みよく、働きやすい社会への「まちづくり」こそが、労協のめざす自立支援なのだと、私は考えています。

どんな職場にしたいのか、どんな地域にしたいのか、つながる。